

病理診断科

進化する腫瘍の個別化診療を支える病理

【がんゲノム医療、分子標的治療を担う高い質の医療情報提供】

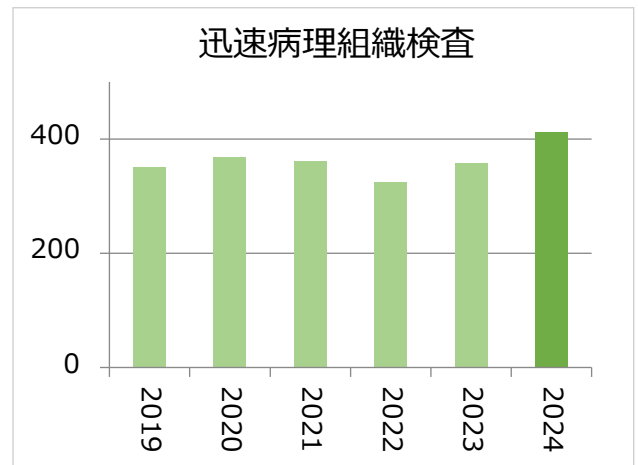
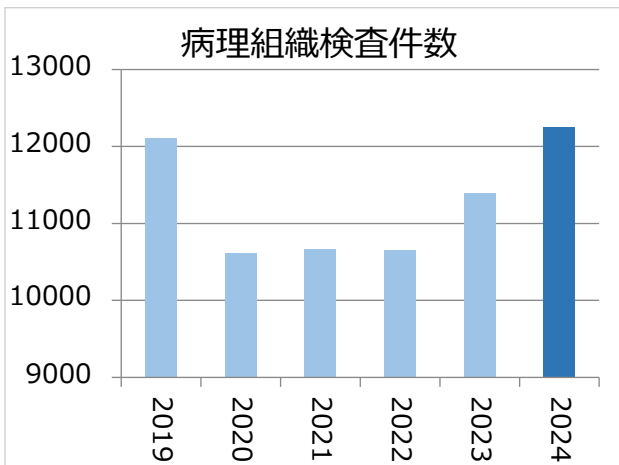
近年発達のめざましい分子学的医学的知見、がん診療の中で、がんゲノム医療がとりわけ注目され、がん診療は新たな局面を迎えています。このがんゲノム医療には、適切な検査検体の確保が必須ですが、その検体は病理検体が中心となっています。遺伝子解析のためには検体の適切な固定が必要ですが、当検査室では、検体の固定に関して、採取後の速やかな固定、DNAの破壊に繋がる過固定の回避の伝統が、踏襲されています。新病院ではゲノム検査の対象検体となる組織ブロックの保管場所も適正温度で整備されています。これらの取り組みにより、当院での検体不適による検査不能例はほぼ皆無であり、極めて良好な情報が得られています。また、臨床からの依頼を受けると速やかに検体を準備し、一日でも早く結果を届けられるよう、努めています。

【国際標準化機構 ISO15189の取得～信頼される検査室をめざして～】

ISO(International Organization for Standardization)15189は、検査結果の質を管理、担保するため臨床検査室に対して課せられた国際基準で、新病院となり同規格を取得しました。検体採取から結果報告までのすべてのステップに関して詳細に取り組むべき事項が規定されており、これにより、より信頼性の高い結果報告を提供します。

【診療実績】

病理組織件数は開院以来概ね右肩上がりに増加しています。2020-23年は、新型コロナ蔓延に伴いやや件数が落ち込みましたが、移転を経て2024年はそれまでの過去最高であった2019年を上回り、本年はさらにそれを超える勢いです。また、手術方針の決定に寄与する術中迅速病理組織検査件数も2024年には過去最高で400件を超えており、手術件数の増加に呼応し増加傾向にあります。



詳細につきましてはHPの当科「診療実績」をご確認ください▶



【癌拠点病院・研修指定病院としての病理の役割】

がん拠点病院を支える病理診断科として、治療方針の決定、治療の効果評価に寄与する確かな病理診断の提供すべく、常勤病理医3名に加え、非常勤医師として、元広島市民病院病理診断科主任部長の松浦博夫先生、広島大学から中桐先生、青江先生の強力な支援を得て、7名の細胞検査士を含む9名の臨床検査技師、病理診断補助員とともに、一丸となって取り組んでいます。また、研修医教育制度において、全人的病態把握の学習の観点から院内臨床病理検討会(Clinico-Pathological Conference)は欠かせません。CPCを定期的開催し、医療の質の維持、向上に勤めています。

【スタッフ紹介】

▶金子 真弓 (H4年卒)

○役職:病理診断科主任部長/臨床検査部部長

○専門:外科病理一般/乳腺病理

広島大学医科学研究科病理学研究室(旧第二病理)で乳腺の前癌性病変の研究により学位取得。
専門分野は乳腺病理。病理専門医、細胞診指導医。広島大学病理学教室 臨床教授

▶木村 修士 (H25年卒)

○役職:病理診断科副部長

○専門:外科病理一般

▶神原 貴大 (H28年卒)

○役職:病理診断科医師

○専門:外科病理一般

広島大学医科学研究科病理学研究室(旧第二病理)で悪性中皮腫の研究により学位取得。
病理専門医、分子病理専門医。

【非常勤医師紹介】

▶松浦 博夫先生

○元広島市立広島市民病院病理部主任部長

○昭和48年広島大学卒

▶青江 耕平先生

○広島大学医科学研究科病理学研究室(旧第二病理) 大学院4年

○令和2年広島大学卒

▶中桐 徹也先生

○広島大学病理診断科助教

○令和1年高知大学卒

